

万葉

Manyoh

園田天光光先生に感謝

如是我聞—私はこう聞いた

1月29日夕方、突然テレビに園田天光光先生の悲報が流れ翌日は各新聞に報道され、皆さんからは、次々と問い合わせが殺到。事務所は数日パニック状態が続きました。ご家族のみの密葬で2月1日お通夜・2月2日告別式が滞りなく済まされました。

「偲ぶ会」は3月13日(11:00~13:00)明治記念館で行います。超党派で構成する一冊の会は“偲ぶ会”に多くの参加希望者がおりますが、人数には制限があります。

そこで事務所に駆けつけて下さった方々の思いを会の代表として万葉にまとめました。この万葉を園田天光光先生への感謝の気持ちとさせて頂きました。



(お通夜の夜空には月が煌々と輝いていました。)



(斎場)



(斎場)

一冊の会会長 大槻 明子：思い起こせば、私が天光光先生に初めてお会いしたのは、19歳の時でした。母に連れられて小金井のご自宅に伺うとおませなお姉ちゃまという印象でしたが、回光ちゃんが上手にご挨拶をして出迎えて下さり、その後ろには、恥ずかしそうに末っ子の直ちゃんが“かくれんぼ”している様に優しい笑顔でそっとこちらを見ていたことを、とてもよく覚えています。

お暇^{いとま}のご挨拶の時、天光光先生は「一週間後に必ずいらっしゃい。」と声をかけて下さいました。お約束の日に再度お尋ねすると「お母様には大変お世話になりましたのよ。」と真っ赤な瑪瑙^{めのう}の指輪を私の指にはめて下さいました。我が家は、戦前お国に貴金属類を全て供出してしまったので、私は指輪を持っておりませんでした。天光光先生は私にとっては知的で美しい叔母様でした。嬉しくてその指輪をして当時、博之さん(13歳頃)とお遣いに行った時のことが走馬燈の如く、思い出が蘇ってきます。その後私は結婚し、少し先生とは疎遠になりました。

私が創設した一冊の会は、女性の人權問題等を多角的に学び啓発活動をしている会です。1999年頃会では日本の女性が初めて参政権を行使した時の証言集^{ままと}を纏める時でした。天光光先生と再び巡り合い賛同していただき、この時から一冊の会の理事としてお力添えを頂くことになりました。その後、園田天光光先生と共に活動した主な事を挙げます。

- ① 21世紀開幕記念の調査として「昭和21年4月10日初の女性参政権行使に関するアンケートと証言集」市川房枝基金受賞『1946.4.10初の女性参政権行使と日本女性自立への出発』出版^{たびだち}

- ② 「一冊の会」読み合わせ櫻華塾（名誉、地位、学歴、財産、国籍、年齢、男女を問わない会）の塾に若いメンバーと共に「私も一緒に学ぶわね」と言って下さり、あるときは講師を務めて頂き現在に至りました。
- ③ 会の主たる活動の識字推進（74 ヲ国）。
- ④ ユニフェムさくら設立（2001年）に参画。副会長に就任。現在「国連ウィメン日本協会さくら」の永久最高顧問として女性の地位向上・女性の人権尊重の推進の為に汗を流して下さいました。
- ⑤ 日本タンザニア友好協会・日本レソト王国友好協会副会長に就任。
- ⑥ 2011年3月11日東日本大震災・東北支援を開始。この4年間一人一人に寄り添いながら“蘇生の道・心の復興”を見届けるまで持続支援を望まれておりました。

「一冊の会」では、今日まで90回以上支援活動を継続中。

今年、一冊の会50周年の節目の年です。永久最高顧問園田天光光先生と共に全ての活動に挑戦中。

最後になりますが、天光光先生はよく“慈母の心”の大切さをお教え下さいました。母の心は深く温かく、全てを包み込む大きな心です。私もお教えに沿って成長して参ります。

昨年の晩秋、藤澤まり子さんから喜び勇んでの電話。「さっき天光光先生のお車にお会いしました！先生お元気でした！」と声を弾ませての報告。偶然青山2丁目の交差点での出来事。園田天光光先生の長女の回光さんが素早く気づいて先生と共に会釈をして下さったとの事。これが、天光光先生のお姿を見たのが最後となり、一冊の会としては永久のお別れとなってしまいました。

衆議院議員 高木 美智代： 先生とお別れすることになる日が来るなどとても信じられません。限りない尊敬の念を込めて、謹んで哀悼の誠を捧げます。

日本初の女性国会議員であられる先生は、「一冊の会」の一員であり2003年初当選の私にもことのほかお優しく、常にお心にかけて頂き、温かいまなざしの中で育てて頂きました。「日本の国益と世界の平和とその両方の視点をもって判断できる政治家」を目指していた私は、ある時、先生に具体的にどのように勉強していけばいいでしょうかと質問致しました。先生は、「まず日本のことを知り尽くすことです。良いことも悪いことも全部自分の腹に収める、そこからです」と、帯の上をぼんと叩いておっしゃって下さいました。

今後も草の根の活動を大切に、平和と国民の皆様の幸福のために、微力を尽くして参ることをお誓い申し上げます。

一冊の会副理事長（尾崎財団理事） 石田 尊昭：

偶然にも、園田先生のご著書『女は胆力』を読み返し始めた矢先の計報でした。突然のことに言葉を失いつつも、園田先生の優しい笑顔、凛とした佇まい、そして催事の度に壇上で語られた力強い言葉が次々と甦りました。「胆力」と強い信念が身体全体からあふれ出る園田先生にお会いする度に勇気を頂きました。国を思い、人を思い、世界のために行動し続けた先生の生き方、強さを一人でも多くの人に伝えていこうと決意しています。



※尾崎行雄生誕150周年を迎えて一冊の会が尾崎行雄記念財団より感謝状を頂く。(園田天光光先生を中心に記念撮影)

中本 和伸： 櫻華塾修了式で、塾長の大槻会長から生徒一人一人にメッセージを頂いた時、天光光先生から「こんなに愛情深い塾はない。期待に応えて生きていきなさい」とお言葉を頂戴しました。期待に応え、園田先生のように国の為、世界の為に役に立つ人材に成長して参ります。「仰げば尊し」を卒業生として歌っていても先生の温かいまなざしと目があい、胸が熱くなりました。感動的なこの一瞬の出来事は忘れられません。

箱根 芳子： 昭和 22 年、片山内閣の鉄道・電気の値上げ法案に党則に逆らって反対票を投じ除名処分されたこと、昭和 42 年、夫、園田厚生大臣（当時）が一年間の在任中に、水銀中毒・イタイタイ病・サリドマイド・四日市・水俣病などを命がけで公害病として認定したこと、更に昭和 53 年、初の国連軍縮特別総会に出席した園田外相が、核保有国には自制を望み、非保有国には核兵器廃絶に総力を結集しようと演説したこと（衆議院会議録情報第 084 回国会本会議第 33 号）をまさに一心同体の妻として誇りに思っていたら、欧米優先の日本外交は偏狭な差別であると、自ら南米諸国と交友を深め「日本・ラテンアメリカ婦人協会」の設立に参画されたこと等々、枚挙に暇がありません。そんな天光先生の正義の心と行動を一冊の会はず受け継いで参ります。

小島 寛子： 2006 年 4 月 18 日「日本タンザニア友好協会」が発足。当時郡山の中心者であった、故林見奈津子さんを中心に本場の“三春の滝桜”を記念に植樹したい、と申し出ました。桜に造詣の深い園田天光先生は大変喜んで下さり、「高円宮妃久子殿下に御成りを賜るので少しでも花が咲いていた方がいいわね。」との一言。桜の木は、一晩中ストーブをつけた温かい部屋に置いて、三春からトラックでタンザニアの公邸に運びました。当日は、初夏を思わせる程の日で“滝桜”も小さいながらも小枝に二輪三輪・・・と咲いてくれました。天光先生から、「皆さんの一念で最高の植樹となりましたね。」と激励を頂いた時は嬉しさと責任を果たした喜びで、今は亡き林見さんと抱き合った事が私の生涯の思い出となりました。

平間 幸江： 私が一冊の会の活動に参画した最初の行事は、2006 年 4 月タンザニア友好協会の発足式でした。高円宮妃久子殿下に御成り頂き、タンザニア大使御夫妻・相馬雪香先生・園田天光先生はじめ多くの有識者をお迎えして盛大な式典となりました。終了後園田先生が「いつか植樹の記念碑を建てましょう。」と大槻会長におっしゃっていました。私は記念碑を作る事に協力しようと密かに決意。大槻会長に相談。2 年後の 2008 年 6 月 8 日、中国書道大家 劉洪友先生たいかりゆうこうゆうに【高円宮妃久子殿下】と揮毫して頂き、大使公邸の中庭に記念碑を立てる事が出来ました。佐藤啓太郎大使はじめ多くの御来賓のご出席を頂き素晴らしい儀式となりました。三春の“滝桜”も大きくなり毎年見事に咲き誇っております。園田先生の“凜”とした中にも優雅で美しい御姿が目には浮かびます。

一冊の会をはじめ日中友好・アフリカ・ラテンアメリカの発展など、世界の平和と人類愛を櫻華塾で教えて下さった事を語り部として伝えて参ります。

北川 ゆかり： 園田先生から、ご主人、元園田直外務大臣が日中平和友好条約締結のために中国に向かわれる前夜（1978 年）と当日の朝、水盃を交わして見送った等のご様子を伺ったことが忘れられません。（一冊の会万葉冊子創刊号 P7）妻として、心はご主人と共に平和条約の成功に命を懸けられ、なかでも鄧小平閣下が「尖閣諸島がどちらに所属するかということは、将来頭のよい子孫に任せましょう。とにかく条約を早く結ぼうじゃないですか。」（同 P9）このお話は園田先生から何度も何度も繰り返し伺いました。いつも一言違わずお話になります。一冊の会櫻華塾では、貴重な講演を記録に残し後世に伝えております。今となってみるとすごい歴史の生き証人の発言だった事に身が引き締まる思いです。（条約調印 1978. 8. 10）まさに一世一代の大仕事で、そのおかげで日本と中国の今があると思えます。

片山 明日香： 女性が初めて一票を投じた 1946 年 4 月 10 日を記念し、議員会館で一冊の会主催の勉強会を行った際、女性で初めて衆議院議員となられた天光先生から当時のお話を伺いました。戦後焼け跡に遊説中に大槻会長のお母様と出会いました。お母様は、戦前家父長制度の中、表だって女性の人権を主張する事は出来ませんでした。戦後やっと女性の解放の扉が開かれた事を心より喜び「時機到来」とばかりに天光先生とお二人は意気投合したそうです。



※永久最高顧問相馬雪香先生、永久最高顧問園田天光先生のお誕生会を合同で毎年開催し参加者全員がしおりを頂く。

岸田 和江： 2002年、北京で開催された中日国交正常化30周年記念中日女性交流大会に参加、園田先生の堂々たるお振舞が眼に焼き付いています。又、私の友人で小学校時代に街頭で園田先生の選挙演説を聞いて大変感動し、将来議員になると決意し、遂に市会議員となった福晴美さんが大槻会長と共に園田先生に直接激励して頂いたことも宝の思い出です。



※三木首相の奥様と園田天光先生が日本代表を務め万里の長城の下でサイン。
(中日国交正常化30周年記念・中日女性交流大会)

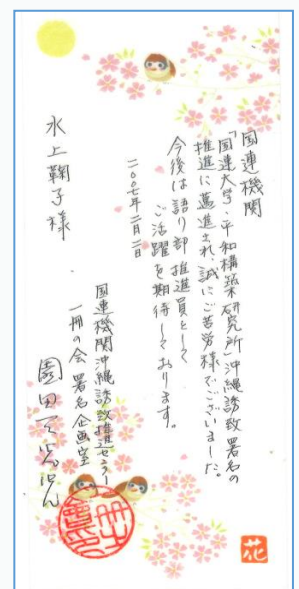
三坂 万里子： 日本女性の歴史的転換期、1946年の参政権が生んだ初の女性国会議員であられた園田先生はいつも大和撫子魂を表すような凛とした着物姿で、人間の尊厳、平等、平和を熱く語って下さいました。そのお姿とお声は深く胸に焼き付いております。そして、相馬先生が築かれたアジア・太平洋の女性の幸せと平和のために築き育てて下さった連帯の組織FAWA。園田先生に日本の事務局長として期待され育てて頂いたことは大きな誇りであると共に、その責務に身の引き締まる思いであります。偉大なる先輩の園田先生の示された大道を精進して参ります。

瀬澤 富子： 2003年7月18日国連大学ウタント大会議場で「ユニフェム日本国内委員会10周年記念大会」で緒方貞子先生の講演が不成功で終了。突然園田天光先生が「今すぐ緒方さんに会いに参ります。」と申されました。当日の先生の係は私でした。しかも頼りにする大槻・小山のお二人は別の部署の担当でその場にはいません。整理役員に必死で事情を説明してもガードは固くとても緒方先生の控室にはいけません。この日、先生は慶応病院を抜け出してのご出席でした。また、緒方先生は4日前にアフガニスタンから帰国なさったばかりです。園田先生は1年前、大槻・小山の二人が識字推進の使命を担って銃を持った兵士に護られアフガニスタンから帰国。現地の厳しさの報告を受けておられたので、大親友の緒方先生のご無事なお姿に接し嬉しさに飛んで行きたいご心境だったと思います。私はマナー違反と知りながら大声で“園田天光先生が参りました。”と控室の前の廊下で何度も繰り返しました。すると緒方先生がその声をお聞きになって控室から飛んで来て下さいました。お二人は「まあー。まあー。」と言葉にならない会話で再会を喜び、挨拶を交わしました。病を押して駆け付けた園田先生を優しく労わり、抱きかかえて控室の中に招き入れてしばしの対談となったのです。この時のお二人のツーショットをカメラに収める事が出来た事が、私にとって永遠の宝であり生涯忘れられない出来事です。後日先生に何度もお礼を言われ、恐縮の限りです。

水上 鞠子： 2007年、沖縄に国連機関を誘致する署名運動で、那覇の決起大会に出席、沖縄の菓膳料理をご一緒に頂いたことが忘れられません。「推進員としてご活躍を期待しています」という一筆箋のメッセージは今も大切にしております。

松岡 笙子： 憲政記念館で孫の橘和美優のバイオリンの演奏を聴いてくださり激励のお言葉を頂きました。暖かいお心をほんとうに有難く思っております。

足立 久子： 若き園田先生は、純粋な白亜の恋を愛に昇華させ結実させました。そして立派な家庭を築かれ、二人のお子さんを育て上げられ、国会議員を辞しても夫に国を思う一念を託し、生涯ブレル事なく信念を貫き通した方と、塾長から伺いました。私も一筋の道を通し貫く人間に成長したいと決意しています。



村岡 清佳： 一冊の会と世界銀行共催のチャリティーコンサートは、世界銀行が一冊の会の活動を認めた証拠と、この栄誉を天光光先生は心から喜ばれたと伺いました。イベント当日、壇上で世界と関わっていく大切さを説かれる先生は、凛として本当に光り輝くようでした。天光光先生の名前を頂いた櫻華塾光グループとして日本と世界の為に活動する事に心に誓いました。

赤田 美香子： 櫻華塾光Gの勉強会では「政治家は、”勝てば官軍負ければ賊軍”どんな事をしてでも当選しなければ駄目よ。私が落選した時。支持者から思いもしなかった請求書が合計2億円も届きました。」聞いていた私は身震いをしてしまいました。天光光先生は返済の為、必死になって1年間で1億円を返済、その結果残りは少しずつで・・・と多くの支持者が言って下さったそうです。「お金持ちの奥様に随分助けてもらいました。借りては返しの繰り返しで責任を果たしました。どんなに経済的に困っても顔に出しては駄目よ。お歳暮等の礼儀は欠かさないう気をつけました。」との先生のお話に、厳しい世の流れにも負けない行動、いかなる時でも真心で礼を尽す大切さを教えて頂きました。

今元 佑美： 天光光先生は戦後、飢餓で苦しんでいる人々を上野の地下道で見た事が、国会議員を志すきっかけになったと聞きました。私も先生を見習い、常に自分に何が出来るかを考え、行動して参ります“何があってもブレナイ”の教えを守る華グループとして平和建設の使命を一步一步築いて参ります。

藤澤 まり子： 園田天光光先生は生前「一冊の会」事務所によく立ち寄って下さいました。”病院に来たので——”と急に来られる事が何度もありました。また、先生は「大槻さんのお母様には本当にお世話になりました。この会のご縁も大槻さんのお母様への感謝の思いからですよ。」と語られておりました。そして、大槻会長の手料理を少しずつ堪能されていた事が強く印象に残っております。

櫻華塾のおり、先生が「一冊の会」の後継者の皆さんにと櫻華塾のおり、私が代表して直接先生から「中日邦交正常化30周年記念、中国古代文化名人」を頂戴致しました。会では大槻会長と小山理事長も中国から頂いております。素晴らしい記念品です。生涯大切に参ります。



一冊の会の事務所にて

石井 従紗子： 会長から「もうお帰りにならないとご家族が心配をなさいます。」と申し上げると、もうちょっとの繰り返しで長時間事務所での懇談が続きました。そのお蔭で居合わせた私たちは沢山の宝の歴史を教えて頂きました。

瀧川 紗智子： 天光光先生が衆議院議員に初当選し取り組んだ事の一つに、率先して国立ハンセン病療養所を訪問する事でした。患者と一緒にスイカを食べたお話を聞きました。病への誤解や偏見が残る中でも病棟に赴き、苦しむ方々と同じ目線で語り合われた先生。その精神を少しでも継げるよう研鑽して参ります。

また、昨年大槻会長と小山さんから「東北新生園」を訪問された時の様子を伺いました。一冊の会はハンセン病について50年前から学び理解を深めていたのでその実績は天光光先生譲りです。今ではハンセン病患者の皆さんも高齢になられ、病気を理解されずご自分の故郷に帰れない実情を聴きました。

先人の偉大な功績を讃え、私達櫻華塾生はグローリア部の語り部として後世に継いで参ります。

大槻 由美： 園田家と大槻家の不思議なご縁を感じております。園田直先生がお亡くなりになった31年前、私の祖母と学生だった父がご自宅に駆け付けたそうです。当時は、今と違って携帯電話もない時代でした。家族の皆さんは連絡や来客の対応に追われ、直先生の回りでお世話する^{てかず}手数が足りず、祖母と父がご家族に代っておそばに座っていたということを知っています。

我が家は祖母のお母さん(曾祖母)と天光光先生との出会いから70年。祖母は報恩感謝の“誠”を“偲ぶ会”にかけているようです。その胸中は私には計り知れません。祖母達が切り開いた女性の地位向上・女性の人権とその歴史をしっかり学び、後継にバトンを渡して参ります。

椎名 節子： 今年には戦後70年ということで“生命の尊厳”をテーマに、櫻華塾を天光光先生のお誕生日である1月23日に開催致しました。天光光先生がご出席された数年前の勉強会の話が話題になりました。岸田先輩のお父様は沖縄で戦死。「平和の礎」の記念碑の中にお父様のお名前を見つけ出した時の感想を述べられると、先生は結婚なさる前のご主人の体験を語って下さいました。当時園田直さんは特攻隊長でした。8月15日“天皇陛下の玉音放送があるので整列するように”との上司の命令。既にプロペラは回っていましたが、最後の特攻隊の出陣を激励して下さい有りがたいお言葉を賜ると思い、緊張しながら拝聴していると天皇陛下による終戦の宣言。お国の為に散っていく覚悟の隊員は、飛び立とうとします。それを必死で引き止めたそうです。それを聞いていた塾生一同は身が引き締まりました。私は、生命尊厳の連帯の主体者を目指して努力することを決意致しました。

山内 聖士： 私は入会して日が浅く、園田先生にお会いしたことはありません。園田先生がご高齢になられても、世界の女性の人権についての懇談会で大槻会長にいつも質問しておられた、と多くの塾生からお聞きし、何歳になっても探求し続けるご姿勢に深く感銘を受けました。今いる場で光輝く人材として誇りを持ち、ライオンキンググループのメンバーとして、福井君共々自分に出来る貢献を考え、IT関係の担当者の自覚で責任を果たして参ります。

一冊の会理事長 小山 志賀子： 昨年園田天光光先生は、マスコミの取材が目白押しで大変お忙しい時でした。「一冊の会」も10月27日で50周年を迎えるにあたり、先生と打ち合わせをしようとお連絡を致しました。「先生！来年の（2015年）10月25日50周年のセレモニーを目黒雅叙園で開催します。」とお伝えしますと、早とちりをして「それは大変もうすぐね」と言って「時間がないわね。打ち合わせをする時間をひねり出さない。」としきりに気にしておられましたが「先生！来年の10月25日です。」と言いますと、「そうお、それじゃまだ大丈夫ね。必ず出席しますからくれぐれも皆さんに宜しくお伝え下さいね」と張りのある元気なお言葉を頂戴。先生とお約束が出来、会員一同大喜び。爽やかな初秋の風が事務所に吹き抜けたひと時でした。春の予感、寒風の中に兆す。今そんな思いで、先生から温かく育て頂いたことに感謝の思いで一杯です。

昨年お亡くなりになった一冊の会最高顧問・丹野榮伍先生はお能や謡曲を通して園田天光光先生とは共通の話題があり、親しみをこめてお姉さんと呼んでおりました。お姉さんの事は自分が担当と言って、支援をして下さいました。また一冊の会副理事長の加茂福史様は園田先生がお亡くなりになるまで長年に亘り先生を支え続け、特に東日本大震災の4年間は園田先生の分まで支援に協力して下さいました。心より感謝申し上げます。

※全ての皆さんのお声を掲載するには紙面が足りません。

お名前だけ掲載させて頂きます。

一冊の会親善大使カズン・一冊の会親善大使ドン・アルマス
高村一郎・鬼童貴章・瀬沢義人・鈴木幸一・古川宏子
田村洋子・野本朝子・塩谷千図子・鹿谷威夫・内藤明子



※一冊の会の事務所に飾られている園田天光光先生のお写真

編集・文 大槻明子 小山志賀子